

昭和十五年度

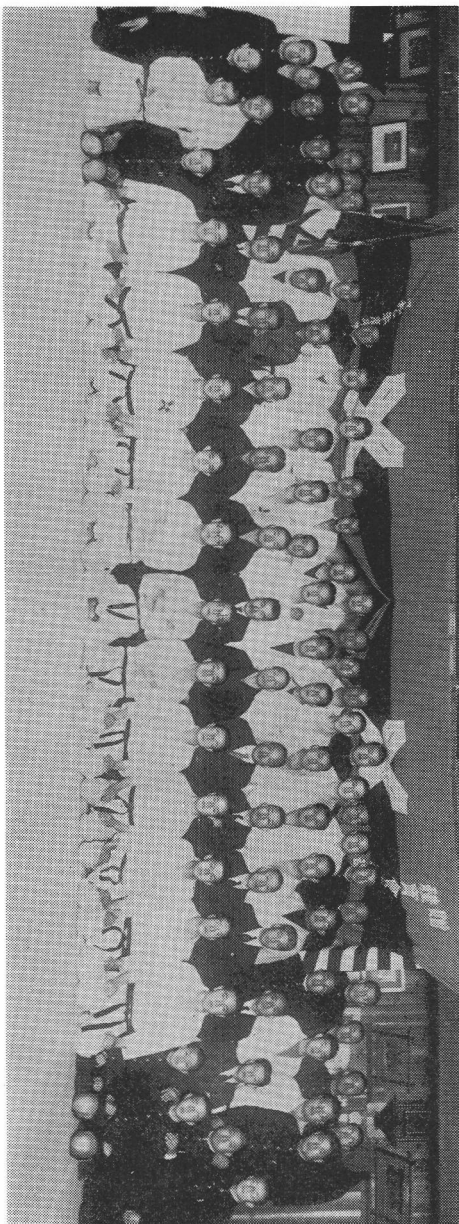
回顧昭和十五年誌

田岡 協

昭和十一年の復活第三回で中断していた早高対予科高等部戦が全早慶戦として本年より十年間の誓約で実現することになった。十二年以降中断したのはかねてより早大側は有段者部員凡そ百名を擁しており、全早慶としたい、但し人員は三十名以上でないと選抜に苦しむとし、塾側は三十名では初段迄動員せざるを得ず代表選手としては最大二十名が限度であるとしたためで、十二年以降、藤川、羽鳥、赤塚、飛田各五段、以下山崎、石渡（顯）、安田、高木、横井三段等が入学して上位は全国でも強力な陣容で勝算あり、寧ろ十五名程度の小人数を主張していた、それ以後交渉は継続していたが不成立のまま推移していったものである。（この事情については前部史「慶早戦停頓について」上妻先輩……六九三頁と大同小異である）。

十二年以降当時の幹事、古屋、小西、近藤先輩に引続き桑原、三井、田岡、石渡等が早大、尾崎君等と折衝の結果、折しも両校先輩の間にも東都の両雄戦わざるべからずの気運に小異を捨て十五年五月四日、後援の読売新聞社に於て秋十一月十日を期して全早慶戦が合意されたのである。

そうして年初に懸案の全早慶戦が成約された昭和十五年は極東では日支事変が抜き差しならぬ泥沼に入り、欧州ではオランダ、フランスが対独降伏、独ソ戦の前夜であり、世界的にも軍国調で学生生活も漸次窮屈ではあったが塾柔



昭和十五年卒業生送別大会記念

早慶柔道試合協約

人員 選手貳拾名 補缺五名

一期日 検査月第一土曜日又第二土曜日午後二時

試合方法 紅白勝負

一試合時間 大將副將十分五分 三將以下七分五分

二審判規程 講道館審判規程ニ依ル

一打合せ 但し柳込四十秒、三手抄三手投有りトス
毎年五月初旬試合協約日審判員並ニ其
他準備就緒協議ス

右協約 向拾年間之ヲ嚴守ス

尚昭和貳拾四年夏打合せ於て昭和貳拾五年夏

以後事更改ヲ協議ス

右協約

昭和拾五年 正月冬拾日
廣徳義塾大講道館柔道部

新 専 長
柳 正 三

早稲田講道館柔道部
代表 長 尾崎 裕 徳

代 表 長 木内 重 四 郎

主 命 人

古賀 茂 早 生

道部は部員の實力も充実して活潑な動きがあった年である。

春休中の日吉合宿明け直後四月九日夜日吉道場が火災で焼失する等不運があったが三田道場に練習を集中して却って効果があったかと思われる。

さて早慶柔道に付ての雑感を憶い出すまま誌してみる。

先ず今度の第一回戦は試合前から先鋒、中堅に優る早軍が後半とるべき逃げはある程度予想されていたことであるが、これほど恥も外聞もない策戦をとること迄は考え及ばなかった。改正された最近の審判規程では勿論通用しない戦法である。

しかし後日早軍大将尾崎君も後味の悪い勝利であり、先輩からも早稲田の名にかかると不評をかったことを漏らしており、お互いに天下の早慶第一戦としては不本意であったことを反省したことがある。又戦後とはなったが審判規定改正の一因になったとも考えられなくはない。

次に早慶柔道戦の推移について見ると、明治三十五年の第一回、三十六年の第二回慶早戦及び昭和三、四、五年の慶予、早高戦については前の「慶応義塾柔道部史」に記述され

ており今回の「続史」で昭和九年以降の復活慶予、早高第三戦迄と第二次世界大戦と学校柔道の禁止で、昭和十九年より十年間中断があったものの、昭和十五年より全早慶戦として今日迄柔道の盛衰と共に両校柔道部の栄枯が綴られるわけである。明治時代の塾柔道は段位必ずしも高段ならずとも、その盛威を大正時代に引継いで昭和初期に到る迄、三田柔道として講道館春秋の紅白試合等に一方の主力たり得たる名門であったが、復活後の昭和十年代も又塾柔道部の一時期を画したものと云えよう。

この時期に全早慶戦の誓約が交わされ今日に到ったわけであるが、戦後柔道解禁後数年間は早慶共活況を呈したものの、入学の困難時代と共にこのところ低調を極め、天下二分の大熱戦とは称し難いのは残念であり、何時の日か、本来の柔道復活と共に昔の隆盛を期待したいものである。

なお持廻り優勝カップについての心覚えを見るに昭和十五年十一月五日銀座明治製菓で早側委員、尾崎、小田、木内君と塾三井、石渡、羽鳥、田岡が打合わせ後、銀座山崎で三百円也で飾ってあったのを磨き直して百三十円に値切ったことが残っており、これは確か両校先輩の寄贈の筈である。

又試合の呼称及びカップ等に刻む両校名の順序については小泉塾長からは設立の序列より慶早であるべきだとの指しを受けていたが早側が受入れる筈なく尾崎君と田岡がジャンケンで早慶となったことが想い出される。

										無級の部		進級月次試合		幹事		師範		部長		役員						
6	5	4	3	2	1											島田房蔵	羽鳥輝久	石渡一	三井文雄	桑原正	田岡協	清水正一	中野正三	飯塚国三	橋本孝	
田	山	八	森	伊	八											田	鳥	渡	井	原	岡	水	野	塚	本	員
鎖	川	木	正	捨	木											房	輝	一	雄	正	協	正	三	国	三	孝
正	司	郎	一	夫	郎											蔵	久	一	雄	正	協	正	三	三	郎	孝
引	引	引	体	引	引																					
分	分	分	落	分	分																					
岩	田	山	八	伊	八																					
上	川	木	森	沢	木																					
那	川	木	森	沢	木																					
須	鎖	博	德	正	捨																					
雄	正	司	郎	一	夫																					

一月二十四日(水)

二級の部			三級の部				四級の部											
3	2	1	4	3	2	1	7	6	5	4	3	2	1	11	10	9	8	7
福	福	福	森	森	塩	峰	小	高	奥	島	北	西	西	塚	板	技	枝	岩
田	田	田	井	井	山	岸	倉	橋	井	川	川	村	村	本	橋	村	村	上
		憲		光	保	仙	保	正	津	惠	英	一	一	太	貢	利	利	那
		雄		武	二	三	雄	雄	二	一	一	雄		郎	一	一	一	須
足	押	内	内	大	背	大	引	足	合	袈	合	引	釣	引	引	合	弘	引
弘	込	股	股	外	負	外	分	弘	技	固	技	分	込	分	分	技	腰	分
○	○	○	○	○	○	○	石	○	○	○	○	北	金	高	塚	○	○	○
吉	村	池	円	塩	森	塩	田	小	高	奥	島	川	替	木	本	板	柴	枝
川	松	貝	谷	山	井	山	田	倉	橋	井	川	富	高	木	太	貢	久	村
清	健	孝	和	光	保	保	満	保	正	津	惠	一	弘	正	郎	一	夫	利
一	吉	孝	夫	武	二	二	男	雄	雄	二	一	一	弘	弘	郎	一	夫	一

4 吉川 清 引分 小林 重太

右の結果進級せし者左の如し。

丙組へ編入 八木徳次郎、伊沢捨夫、森 正一、山川博

司、田 鎮正、岩上那須男

乙組へ 枝村利一、板橋貞一郎

三級へ 実井津二、小倉保雄

二級へ 森井光武、円谷和夫

卒業生送別紅白試合

二月四日

紅白試合

紅 白

先鋒 〇木島 博 合技 先鋒 志保沢 忠世

木島 紋技 〇平 弥一郎

山本 袈裟固 〇平 弥一郎

〇松村 泰二 背負投 平 田中治郎

松村 引分 田中治郎

奥田 直道 大外刈 小野 信一

〇田中 常司 弘腰 小野 英二

田中 体落 〇石渡 渡

〇横田 実 支釣込足 〇石渡 渡

横田 大内刈 〇磯辺 晃平

成宮 誠一 引分 磯辺 晃平

〇笠原 慶太郎

笠原 支釣込足 後藤 政行

坂本 達夫 小外刈 〇佐藤 清

〇大沢 夫 大外落 〇佐藤 清

〇大沢 夫 大外落 佐藤 清

〇大沢 夫 大外落 蒲生 哲也

大沢 夫 大外落 永野 祐正

大沢 夫 大外落 横井 肇

大沢 夫 大外落 横井 肇

大沢 夫 大外落 横井 肇

大沢 夫 大外落 横井 肇

大沢 夫 大外落 横井 肇

大沢 夫 大外落 横井 肇

大沢 夫 大外落 横井 肇

大沢 夫 大外落 横井 肇

大沢 夫 大外落 横井 肇

大沢 夫 大外落 横井 肇

大沢 夫 大外落 横井 肇

大沢 夫 大外落 横井 肇

大沢 夫 大外落 横井 肇

大沢 夫 大外落 横井 肇

大沢 夫 大外落 横井 肇

大沢 夫 大外落 横井 肇

大沢 夫 大外落 横井 肇

大沢 夫 大外落 横井 肇

大沢 夫 大外落 横井 肇

後藤 政行

〇佐藤 清

〇佐藤 清

〇佐藤 清

〇佐藤 清

〇佐藤 清

〇佐藤 清

〇佐藤 清

〇佐藤 清

〇佐藤 清

〇佐藤 清

〇佐藤 清

〇佐藤 清

〇佐藤 清

〇佐藤 清

〇佐藤 清

〇佐藤 清

〇佐藤 清

〇佐藤 清

〇佐藤 清

〇佐藤 清

〇佐藤 清

〇佐藤 清

〇佐藤 清

〇佐藤 清

〇佐藤 清

卒業生掛勝負

三段	笹川俊夫 (九分)	○小内刈 ○大外刈 ○小内刈 ○大外刈	小野信一 窪田羊三 田村政行 後藤誠一
二段	坂本英男 (四分)	○内股 ○内股 ○内股 ○内股	田中常司 松村泰二 山本三 峰岸仙三
二段	湯地貞俊 (一分五十秒)	○背負投 ○釣込腰 ○釣込腰 ○釣込腰	松村泰二 山本三 森岡賢一郎 峰岸仙三
初段	奥田直道	○大外刈 ○大外刈 ○大外刈	塩山保二 高崎二 奥井津二
		○大外刈 ○大外刈 ○大外刈	三門哲夫 森岡賢一郎 峰岸仙三

三段	大沢達夫 (二分)	○背負投 ○大外刈 ○内股	松村泰二 田中常司 山本三 鈴木康吉
三段	石橋正記 (六分)	○支釣込足 ○内股	小野信一 田中常司 西原正典 後藤政行
三段	山岡三郎	○縦四方 ○跳腰 ○内股	蒲生哲也 石渡英二 成宮誠一
三段	守谷一郎 (八分)	○逆 ○押込 ○合技 ○大内刈	窪田羊三 西原正典 石渡英二 磯辺晃平
		○大外刈 ○大外刈 ○大外刈	松村泰二 山本三 窪田羊三 磯辺晃平

三段 笹間

猶興

○大外刈 山本 備
○大外刈 田中 常司
○大外刈 西原 正典
(七分)
○大外刈 磯辺 晃平
○足 成宮 誠一

五段 鳥海

又六郎

○私腰 蒲生 正典
○私腰 西原 正典
○私腰 永野 祐正
(四分)
○私腰 石渡 頭一
○私腰 和田 徳藏

勝負の結果進級せし者左の如し。

四級へ 古屋 鴻 三級へ 北川英一

二級へ 塩山保二、塩山 豊

体育会浴場及び柔剣道場の焼失

四月九日午後八時半頃日吉大学予科構内にある体育会浴場より発火、隣接せる体育会柔剣道の道場に延焼し、午後十時頃鎮火したが、焼失家屋は柔剣道場、浴場、物置、ポンプ室及石炭置場で、昭和十年七月に起工し、同年九月三十日に竣工、延坪約二三八坪であった、時局柄貴重なる資産を焼失したことは実に遺憾に堪えない、尚

当夜地元日吉町民の火災現場に駆付けて消防に尽力せられた人々竝に懇切なる失火見舞を寄せられたる諸氏に対し茲に誌上を以て厚く感謝の意を表する次第である。

(三田評論昭和十五年五月号第五二三から)

進級月次試合

四月二十二日(月)

無級の部

1 ○福島 義文

引分 山川 博司

2 ○福島

足 齋 藤 久夫

3 ○福島

合 柴 久夫

4 福島

押 岩 上 那須男

5 ○岩 上 那須男

合 枝 村 利一

6 岩 上

引 板 橋 貢一郎

7 板 橋 貢一郎

大 日 下 桂次

8 日 下 桂次

引 田 中 三千穂

四級の部

1 田 中 三千穂

私 龍 野 醇三

2 龍 野 醇三

引 西 村 一雄

三級の部

1 ○北川 英一

大 奥 井 律二

2 北川

引 高 橋 善資

3 高 橋 善資

合 峰 岸 仙三

二級の部

- 1 峰岸仙三 大外刈 ○塩山保二
- 2 塩山保二 合技 ○福田憲雄
- 3 ○福田憲雄 合技 森岡賢一郎
- 4 福田 引分 内海敏勝
- 5 内海敏勝 大内刈 ○円谷和夫

右の結果進級せし者左の如し。

乙組へ編入 福島義文

四級へ 日下桂次

四級へ編入 田中三千穂

二級へ 峰岸仙三

一級へ 福田憲雄

日満交歓武道大会

五月十三日 於 日比谷公開堂

この日、東京学生柔道連合軍は、日比谷公開堂に満州軍を迎え、各々二五名の精鋭を以て紅白試合を行い、学生軍は不戦四名を残して快勝した。塾柔道部から出場した選手とその成績は三将の赤塚五段は不戦、羽鳥五段は小内刈一勝、飛田五段は内股一勝、桑原四段は引分であった。

本塾対日本体操学校對抗試合

五月二十八日(火) 於 綱町道場

小坂肇	磯辺平	磯辺見	松岡一郎	成宮誠一	成宮誠一	池田龜夫	池田龜夫	井上豊明	井上豊明	福岳泰吉	蒲生哲也	蒲生哲也	蒲生哲也	石渡英二	安東敬三	沢井敬三	太田三四郎	園田康	先鋒
背負投	大外返	大内刈	巴投	巴投	弘腰	引分	合技	袈裟固	合技	小内刈	内股	内股	合技	引分	引分	引分	引分	引分	引分
○小杉	○小杉	○三原	○三原	○三原	○三原	松山	間瀬	室崎	室崎	○田中	○田中	○田中	余合	谷川	藤井	山西	吉倉	豊田	山根

本塾对農大对抗試合

六月五日 於 綱町道場

先鋒 三原 本塾
 平 弥一郎
 ○太田 三四郎
 引分 先鋒 土肥 大
 袈裟固 ○佐藤
 燕返 佐藤

下野川 国男 紋技 ○小杉
 佐藤 徹夫 引分 小杉
 渡辺 徹夫 紋技 ○三戸部
 ○山崎 高 大外刈 三戸部
 山崎 引分 福島
 杉山 引分 西田
 永野 祐正 一本背負 ○広瀬
 ○安田 義也 押込 広瀬
 安田 引分 世良田
 横井 肇 引分 井上
 副将 ○高木 忠祐 大外刈 大染
 高木 大外刈 ○山鼻
 大将 ○石渡 顕一 小内刈 山鼻
 石渡 押込 副将 ○宮木
 大将 杉谷

太田 三四郎 引分
 石渡 英二 引分
 児玉 一男 跳腰
 下野川 国男 引分
 西原 正典 大外刈
 井上 豊明 出足払
 蒲生 哲也 引分
 安東 敬三 跳腰
 ○松岡 一郎 十字固
 松岡 引分
 小坂 肇 足払
 小坂 引分
 成宮 誠一 引分
 磯辺 晃平 大外刈
 安西 正憲 引分
 ○佐藤 倭夫 内股
 佐藤 高 引分
 ○山崎 高 大外刈
 ○山崎 高 大外刈
 山崎 内股
 永野 祐正 内股
 ○横井 肇 崩上四方
 ○横井 肇 大外刈
 青木 引分
 森 引分
 ○末永 引分
 ○末永 引分
 ○市野 引分
 ○市野 引分
 ○市野 引分
 藤崎 引分
 ○藤崎 引分
 横山 引分
 村上 引分
 加藤 引分
 東大 引分
 ○森内 引分
 森内 引分
 池野 引分
 沼野 引分
 立石 引分
 白石 引分
 ○高橋 引分
 ○高橋 引分
 高橋 引分
 倉石 引分

1	古屋 鴻	引分	有島 重武
4	岩上 那須男	引分	板橋 貢一郎
3	枝村 利一	合技	福島 義文
2	亀割 正治	合技	○枝村 利一
1	○亀割 正治	押込	片岡 重仁

進級月次試合

六月十日(月)

大将	和 田 德 藏	引分	不戦
副将	○渡 辺 昌 一	崩横四方	大將 草 田
石 渡	石 渡 一	打 股	副将 ○鈴 木
石 渡	石 渡 一	打 股	橋 詰
高 木	高 木 慶 三 郎	合 技	猪 股
安 田	安 田 義 也	引 分	倉 持
○安 田	○安 田 義 也	釣込腰	倉 持
杉 山	杉 山	横四方	本 宮
○杉 山	○杉 山	大外刈	○本 宮
横 井	横 井	跳 腰	浮 須
		小外刈	○浮 須

折柄来朝中の北加二世柔道見学団と夏季合宿中の塾柔道部は午前十時北加二世軍を綱町道場に迎え歓迎試合を

本塾対北加二世柔道見学団對抗試合

七月十一日 於 綱町道場

3	龍野 醇 三	合技	○龍野 醇 三
2	有島	大内刈	高橋 正雄
1	小倉 保雄	引分	高橋 善資
2	小倉	引分	○高橋 善資
3	高橋 道尚	引分	高橋 善資
1	塩山 保二	引分	○田辺 龍太
2	田辺 諸太	大外刈	○峰岸 仙三
3	峰岸 仙三	体落	○吉川 清一
4	○吉川 清一	足払	塩山 豊
5	吉川	合技	○森岡 賢一郎
6	森岡 賢一郎	体落	○池貝 孝
7	池貝 孝	大外刈	○井関 仁
8	井関 仁	釣込腰	○円谷 和夫
9	円谷 和夫	引分	長尾 正

○児玉	一本背負	園田
児玉	袈裟固	○小坂
○渡辺(徹)	背負投	小坂
○渡辺	大外刈	井上
渡辺	引分	下野川
高木	引分	成宮
○横井	崩縦四方	松岡
横井	引分	磯辺
石渡	引分 副将	山崎
和田	崩上四方大将	○飛田
桑原	崩上四方	飛田
副将	一本背負	飛田
○三井		
大将 赤塚		

紅軍の勝利に帰したり。

関西九州遠征日誌

田岡 協

秋の全慶早柔道對抗試合に備えて関西九州方面へ武者修業旅行を行うことになり、その準備として七月九日より二十日迄十二日間三田道場に合宿する。故障者もなく元気に予定通り合宿を終えてしばし夏休を愉しむべく一旦解散し各自故郷へ海へ山へと別れ一ヶ月余。

○八月二十三日

大阪駅午前十時集合。一ヶ月の別れの懐しさを口々に元氣一杯。

遠征参加者は、飯塚師範引率の下に、桑原、三井、和田、佐藤、安西、石渡、渡辺(昌)、高木、池田、赤塚、羽鳥、安田、太田、横井、下野川、飛田、磯辺、藤川、成宮、松岡、小坂及小生の一行二十三名。

榛葉さん、乳井さんに出迎えられ、宿舎神戸の鐘紡兵庫工場へ向う。営業所の平賀先輩に挨拶して午後工場見学、暑いことおびたしい。夜七時から工場の道場で練習。休馴らしの職工さん相手だ。

○八月二十四日 対大阪府警戦

午前中は何処へ来ても同じ合宿風景。横になっているもの、立っているもの、碁を囲むもの、ギャアギャアさわぐもの他種他様だ。午後大阪の淀川工場で大府警察と第一戦を交える為出発。

飯塚先生、谷口さん、笹川さん、羽鳥と五人で落合支店長に挨拶に行く。製品の陳列所を支店長自ら案内されて、そのあらゆる方面に亘る製品に感心し、大鐘紡を感じた。

二時試合開始。

かくて第二戦も快勝。道場で一寸冷たいものを御馳走になる。小生が予科一年の年、関西北陸遠征の際矢張り此の武徳殿で試合したことを思い出す。その時は両軍引分に終った。

大将	副将	赤塚	赤塚	藤川	藤川	飛田	飛田	桑原	三井	和田	和田	横井	渡辺	高木	安田	安田	石渡
田岡	羽鳥	塚	塚	川	川	田	田	原	井	田	田	井	辺	木	田	田	渡
	輝																
	久(5)	豊(5)	豊(5)	男(5)	男(5)	常(5)	常(5)	正(4)	雄(4)	徳(4)	徳(4)	肇(3)	昌(3)	祐(3)	忠(3)	忠(3)	義(3)
	協(5)																
	不戦	引分	引分	引分	引分	引分	引分	引分	引分	引分	引分	引分	引分	引分	引分	引分	引分
	大將	副将	大外刈	合技	合技	跳腰	跳腰	引分	引分	引分	引分	引分	引分	引分	引分	引分	引分
	時田(5)	上田(5)	大野(5)	森井(5)	小林(4)	材井(4)	井上(4)	伊藤(4)	原田(4)	原田(4)	中橋	中橋	中橋(3)	村井(3)	梅田(3)	浦山	浦山

神戸慶応クラブで歓迎会を開いて下さる。柔道部の先輩でない方が多数出席して下さって、予期しなかった歓待振り。ビールも相当出たし、後で親子井、うなぎ井、鱈腹御馳走になる。九時散会、雨模様で散歩もとりやめ急遽帰路。

○八月二十六日

今日は自由行動なるも嵐模様の為出足鈍る。十時過頃から雨も大したことないようなので、三々五々出て行った。夜は淀川工場へ半分、此方で半分稽古することになる。

○八月二十七日

十時過先生と幹事とで平賀さんに挨拶して、鐘紡を辞す。昼飯は南京町の第一楼で田辺君のお父さんの招待で腹一杯御馳走になる。六時二十分の別府行汽船の出るまで自由行動。映画を見るもの、友達と約束してあるもの、それぞれだ。笹川氏の他、沢井、福岳、山ノ内、田辺君等が見送って呉れて第三突堤より「すみれ丸」で別府へ向う。大して混んでもいず、横になれた。

○八月二十八日

未明高浜着。小さな港町だ。十時五十分別府着まで黎明の瀬戸内海の風景を楽しむ。園田君が出迎えて呉れ

る。港では「陸の王者」のレコードがかけられて中々サ
ービス宜しい。旅館は花菱。昨年も殆んど同じコースで
別府へ来ているので、始めての者だけ十人で地獄巡りを
する。海地獄、坊主地獄、白池地獄等をハイヤーで廻
る。宿へ帰って一風呂浴び、直ちに中津へ、福沢先生の
生誕地を訪ねる。此処も矢張昨年来なかつた者だけ十五
名。三田会の方が二三人塾生二人に出迎えられる。歩い
て五六町、旧屋敷、先生の勉強した粗末な土蔵を見る。
帰りは小幡篤次郎先生寄附になる此の町には過ぎた圖書
館で一休して耶馬溪会館で晩飯を御馳走になり五時四十
分の汽車で別府へ引返す。風呂へ入った後、町を一巡し
て湯の町情緒を味う。

○八月二十九日

七時三分別府発、十一時、坊中着。昼食後、バスで阿
蘇へ登る。途中バスガールの美声で説明を聞く。徒歩で
一時間火口まで往復する。火口は此処四日来稀な活動振
とかでかなり大きな石が打上げられるのが見える。

四時十五分の汽車で福岡へ向う。五時半熊本着、此処
で乗り換える間に晩飯をとる。加藤靖夫先輩が此処まで
出迎てに來られる。久留米では秋山万蔵先輩が出迎えら
れ、一緒に來た湯地君は博多まで同行。博多十時八分

着。田中、広橋、河津氏等五六人見えられる。

奉公館へ投宿。此処を根城とすることになる。

○八月三十日 对全久留米戦

昼前河津さん湯地君と一緒に県庁の警察部へ二日に
行 予定の福岡警察との試合の打合せに行く。岩田屋デ
パートで皆と一緒にになり、久留米へ向う。雨がどしゃ降
り になって來た中を。貸切バスで先ず吉武吉雄先輩の墓へ
詣で、水天宮へ参拝し、武徳殿に着く。全久留米軍と対
戦。十八名宛。

◎本 塾

全久留米

先鋒	成宮 誠 一(2)	大外刈	○牛 島(2)
太田	三四郎(2)	引分	牛 島
○松岡	一郎(2)	足 払	寺 崎(2)
松岡		引分	西 崎(2)
安西	正憲	背負投	○黒岩(2)
磯辺	晃平	内 股	○黒岩
池田	亀夫(2)	大外刈	黒岩
池田		背負投	○上村(2)
○横井	肇(2)	小内刈	上村
○横井		大外刈	室 村(2)
○横井		小内刈	森 池(2)
横井		引分	三池(2)

石渡 顕一(3)	跳腰	○西村(2)
渡辺 昌一(3)	引分	西村
高木 忠祐(3)	引分	木下(3)
安田 義也(3)	引分	吉田(3)
○和田 徳蔵(4)	大内刈	江崎(3)
和田	大内刈	○馬場(4)
三井 文雄(4)	大内刈	○馬場
桑原 正(4)	大内刈	○馬場
○飛田 常吉(5)	足弘	馬場
飛田	弘腰	○石橋(4)
○羽鳥 輝久(5)	小内刈	石橋
○羽鳥	釣込腰	天野(4)
羽鳥	引分	東(4)
副将 ○赤塚 豊(5)	小外刈	副将 武藤(4)
○赤塚	大内刈	大将 古賀(4)
大将 藤川	不戦	

久留米軍は五段なしであるが選抜軍だけに元氣者揃いで塾軍苦戦し、殊に四段先鋒馬場君には此方の四段陣総崩れとなり危かった。久留米三田会に出席。

○八月三十一日 対全八幡戦

終日雨だ。十時二十三分の汽車で小倉へ向う。昼飯は小倉の三田会ですぎ焼の御馳走になる。電車で八幡へ。

昨夜冷てた上に疲れも出て下痢するものが多く、予定より人数を減らして十八人で全八幡軍と対す。

本塾 全八幡

下野川 国男(2) 大外刈 ○津村(2)

八幡先鋒津村極端な左自営体に元氣一杯、四五回目の大内技有り。混戦の中左大外落到下野川敗る。

太田 三四郎(2) 引分 津村

津村対太田(2)三十貫の巨漢太田には津村の左体落大内刈も制かず、一隅に押合って引分に終る。

松岡 一郎(2) 上四方 ○浦野

浦野寝技に攻め、松岡の技の崩れに応じ、送襟に攻む。松岡よく逃れ再び立って浦野背負に飛び込み松岡の倒れるところを上四方に抑える。

佐藤 清(2) 逆十字 ○浦野

互角に攻み合ううち、佐藤左内股を稍利かすも今少し。混戦のうちに逆十字極って佐藤敗る。

小坂 肇(2) 引分 浦野

二人を討取った浦野、小坂に対して引分戦法に出で、危しと見るや、寝技に凌ぎ、試合不馴れの小坂実力あれど引分戦法に施す術なし。

池田 亀夫(2) 引分 中山(2)

中山左、池田左右互角に攻防。積極的に攻み合うも極ら

ず。

○石渡 頭一(3) 内股 諸岡(2)

諸岡元氣に立向うも石渡の内股綺麗に極って一本。

石渡 頭一 引分 合屋(2)

合屋左自営体に攻むるも石渡軽く逃げて許さず。二鈴直前合屋焦慮して極端の左に来るを石渡出足払に技有り。

渡辺 昌一(3) 引分 倉原(3)

八幡のホープ倉原豊国中学大将、小柄乍ら極端な左自営体に元氣一杯。渡辺寝技の巧者、守勢乍ら技を封じて遂に引分。

高木 忠 祐(3) 引分 市津(3)

一鈴後高木裏投に技有りとるも引分。

安田 義也(3) 引分 粟津(3)

両者元氣に応酬するも極り技なく、安田機を見て絞めを窺ふも引分。

横井 肇(3) 引分 片山(3)

和田 徳 蔵(4) 引分 中村(3)

和田、先ず小内返しに技有りとる。攻防熱戦二鈴直前相手の崩れに乘じ送襟を狙うも逃られ引分。

桑原 正(4) 大外車 ○永塚(3)

数合後長身を利用しての永塚の大外車美事に極って桑原敗る。

三井 文 雄(4) 大外巻 ○永塚

○羽鳥 輝 久(5) 釣込腰 永塚

羽鳥の釣込腰深く這入って永塚外から足をかけて防がんとするも効なく鮮かに極る。

○羽鳥 輝 久 小外刈 池野(4)

池野左内股に来るを羽鳥腰を落して弾き返し、逃げるところを左小外刈に討取る。

○羽鳥 輝 久 小内刈 田中(4)

羽鳥 輝 久 引分 橋本(4)

武専の元氣者橋本も羽鳥の釣込腰小内刈に度々危地に陥入る。三人を仆して疲れ気味の羽鳥、後半積極的に出ず、橋本又守勢。

○飛田 常 吉(5) 跳腰 岩下(5)

問題なく右跳腰極って飛田勝つ。

飛田 常 吉 引分 大星(5)

大星左に飛田自然体互いに攻むるも時間となる。

赤塚 豊(5) 引分 岩松(5)

元氣一杯の赤塚相手を隅に圧して優勢なるも、度々場外に出で効果なし、熱戦の後遂に引分。

藤川 常 男(5) 引分 古賀(5)

大将同士。古賀守勢固く、藤川の大外刈、内股を受けつけず、遂に引分に終る。

観衆は流石尚武の地、八幡製鉄の可成り広い道場立錫の余地なく、七、八百人。山本、古賀、秋山先輩の他、三田会の若い先輩も大分見え大谷食堂で晚餐会。

九時の汽車で博多へ帰る。

○九月一日

今日は一日休養。日曜で興亜奉公日。明日最後の試合
対福岡警察を控えて一日無為。

○九月二日 対福岡警察戦

県庁の警察部へ打合せに行く。応召者が二名出たそう
だ。此方も桑原と佐藤が昨日の試合で負傷したので十九
人宛で丁度よくなる。

十一時玉屋デパートの田中丸先輩が食堂の特別室で食
い放題の御馳走して下さる。皆、メニューにあるだけの
ものを注文して平均三、四人前宛、刺身、ウナギ飯と色
取々、屋上で記念撮影をした後一旦奉公館へ帰り一時に
武徳殿へ、二時試合開始

◎本 塾 7 — 5 福岡警察

園田 康(2) 引分 山田(初)

両者共に右技。先鋒なるが故に固くなる。園田頼りに大
外大内刈に攻むれども決らず。一鈴直前園田の体崩れに
乗じて山田抑え込むも直ちに脱れる。両者攻め合うも技

に見るものなく遂に引分。

成宮 誠一(2) 跳腰 ○中 島(2)

両者機を見て技を掛け合う中、一鈴後中島の放つ跳腰に
成宮跳ぶ。

○太田 三四郎(2) 内股 佐藤(2)

大兵肥満の太田、機を見て内股放てば見事に決り一本。

○安西 正憲(2) 立四方 猪立山(2)

組合えば両者元氣一杯に暴れ廻り、纏れ合う中、安西肩
車に入り、敵の倒れるところをあっさり立四方に押え
る。

小坂 肇(2) 引分 宇都宮(2)

小坂内股に攻めれば宇都宮腰に喰いついて絞にかかれど
直ちに脱れる。小坂再び内股を放てば宇都宮腰に喰いつ
いて裏投を打ち技有り。二鈴直前、小坂小内刈に崩し袈
袈固に入るも返され引分となる。

磯辺 晃平(2) 払腰 ○中 山(2)

磯辺大内刈に技有りをとるも左払巻に破る。

池田 龜夫(3) 引分 片山(3)

池田内股を惜しくもはずされ、立四方に抑えられるが直
ちに跳返して立つ。一鈴の時敵の内股を危く逃げる。互
いに左右の内股大外をかけ合うも決らず。

石渡 颯一(3) 引分 市津(2)

数分の後、石渡の内股をはずし市津寝技に来る、石渡下から関節をとるが決らず。立上れば又前と同じく寝技に引込んで来る。石渡大内刈をかけるが惜しくも決らず、引分。

渡辺 昌一(3) 引分 助広(3)

助広二十五貫。左払腰を放つを渡辺腰に喰いついて寝技に攻める。助広場内を駆け廻って逃げんとする。場外に別れて再び左払腰。渡辺はずして巧みに攻めるが、助広大力に逃れて抑込ませず。

高木 忠祐(3) 跳腰 ○天野(4)

天野、久留米にて羽鳥に敗れ今日は復讐戦。数分の後、天野の放つ跳腰に高木危かったが技有りに止まる。高木大外刈を連発すれば技有り、互いによく攻め合ううち天野の放つ跳腰に惜しくも高木敗れ、二対二の均衡破る。

安田 義也(3) 引分 江島(4)

江島中々の元氣者、大外、大内刈で攻めるが、安田動ぜず。大内刈をはずして安田寝技に攻めるが相手もさるもの、逆に安田を絞めに廻るも安田得意の亀の子で時間となる。

横井 肇(3) 引分 白谷(4)

白谷極端な右ケンケン内股に攻めるが横井動ぜず。小内刈、大外刈に応酬す。横井の左大外刈惜しくも外る。再び横井右大外にひっかけられるも極らず。互いに鑢を削って技を競うが時間となる。

和田 徳藏(4) 立四方 ○吉田(4)

吉田小兵なるも試合巧者、右小外にて和田の体を崩し、倒れるところを立四方に抑え、一度とけたと見えたが遂に抑え切る。

三井 文雄(4) 大外刈 ○田中(4)

数分の後田中の放つ大外巻に倒れ四段陣振わず五対二とリードさる。

○羽鳥 輝久(5) 釣込腰 江崎(4)

江崎四段なれども剛の者、守勢なれど羽鳥の技を封じて中々許さず。羽鳥機を見て得意の釣込腰をかければ腰は這入らなかつたが、充分なる手のひねりにもんどり打って倒る。敵の腰を引くところを巧に横に崩して鮮やか。

○田岡 協(5) 合技 古賀(義)(5)

田岡病後久々の出場なれど元氣一杯。乾坤一擲の跳腰を放てば敵脆くも飛ぶが、廻り過ぎて惜しくも技有り、田岡しきりに攻めるが内股をはずされて寝技に移り危かつたがよく逃れ、機を見て左内股美事に極る。

○飛田 常吉(5) 大内刈 古賀(政)(5)
立って直ぐ古賀の大外に来るを返し、技有り。飛田盛に攻めるうち左大内刈極る。

○藤川 常男(5) 大外刈 久保(5)
福岡出身藤川の出場に地元観衆中より藤川々々の声頻り。久保は天覧試合に一般に於て準決勝まで進んだ元氣者、本日随一の好取組。互いに左右の跳腰に攻めあう中藤川の内股の帰るところを久保極めて技有り。一鈴後、藤川得意の二段大外刈に久保の巨体大きく飛んで満場どつと湧く。

○赤塚 豊(5) 大内刈 宮地(5)
赤塚の前には宮地小さく見ゆ。赤塚足払に脅かし例の大内刈に軽く極める。(試合記録佐藤 清)

かくて後半塾五段陣大いに振って全勝し、七対五に有終の美を飾る。観衆も武徳殿を埋め尽して試合後も尚中々去らない。

一旦奉公館に引上げ休憩の後博多駅前博多ホテルの三田会歓迎会に出席。先輩も多数出席され歓を尽す。八時半散会。三々、五々遠征最後の夜を十二時まで自由行動とする。

○九月三日

朝食を揃って撰って旬余に亘った関西九州遠征を解散する。四勝一分、先ず良い成績と云えよう。秋の慶早戦に備えてまた新学期から張切ることを誓い、「関西遠征之歌」を以て別れる。東京へ直行するもの、田舎へ帰るもの、長崎から雲仙へ廻るもの、それぞれが遠征の思い出は懐しい。各地で一方ならぬ御厄介になった先輩方、三田会の方々に深くお礼申し上げます。

進級月次試合

九月二十五日(水)

甲組の部

1	中村 寅男	体落	○齋藤 定雄
2	齋藤 定雄	合技	○田島 三郎
3	○田島 三郎	大外刈	平野 三郎
4	○田島	膝車	星野 輝仁
5	○田島	合技	片岡 重仁
6	田島	引分	○板橋 貢一郎
7	板橋 貢一郎	引分	○岩上 那須雄
8	岩上 那須雄	一本背負	○枝村 利一
四級の部			
1	長谷川 誠一郎	引分	○西村 一雄
2	○西村 一雄	体落	稲川 昌生
3	西村 一雄	引分	古屋 鴻

三級の部

4 古屋 鴻 弘腰 ○龍野 醇三
 5 龍野 醇三 上四方 ○藤原 健
 6 ○藤原 健 上四方 高橋 正雄

二級の部

1 北川 英一 合技 ○高橋 道尚
 2 高橋 道尚 引分 小倉 保雄

1 塩山 保二 引分 峰岸 仙三

2 ○塩山 弘腰 森岡 賢一郎

3 塩山 小外刈 円谷 和夫

4 円谷 和夫 膝車 ○峰岸 仙三

5 峰岸 仙三 引分 塩山 豊

6 塩山 豊 袈裟固 ○小林 重太

右の結果進級せし者。

丙組へ 中村寅男、斉藤定雄、平野三郎、星野輝仁、斉藤

親平

乙組へ 田島三郎

一級へ 円谷和夫

第五十回秋季大会兼先輩慰霊祭

十月二十日(日)

恒例の大会も会を重ねて第五十回となり物故先輩の慰

霊祭を兼ねて行われた。第一回は逆算すると明治二十五年といふことになるが初期については柔道部前史にも詳しいことは記述されていない。

物故先輩の慰霊祭については特に対象者はなく又遺族招待等はしていない。

先輩対現部員十一名宛の紅白試合は三将の阿部大六さんに渡会、飛田も投げられて先輩陣の勝ち。

大会終了後六時から塾の研究所で晚餐会、柴田部長の一席等あり八時解散。

成年組紅白勝負

紅

白

先鋒 齋藤 親平

合技 先鋒 ○水野 耕三

○塩山 保二

袈裟固 水野 耕三

○塩山 大外刈

大外刈 峰岸 仙三

池貝 孝

引分 森岡 賢一郎

池貝 体落

引分 小林 重太

奥住 正道

大外刈 荒木 宗久

○大山 勇

大外刈 榎井 富士弥

○丸山 弘腰

大外刈 榎井 富士弥

○丸山 泰二

大外刈 榎井 富士弥

○平 弥一郎

足弘 井上 豊明

日下桂次	○西村一雄	有島董武	龍野醇三	高橋卓男	小谷英男	富沢英郎	○富沢英郎	益子潔	依田祥太郎	柏谷保英	石井大二郎	小佐英二郎	先鋒	普通部	普通部对商工学校紅白試合	大将 池田龜夫	副将 松岡一郎	沢井英夫	石渡英二	志保忠世	平
	引分	引分	引分			引分		引分	引分	引分	引分	引分	先鋒			不戦	引分	引分	引分	跳腰	引分
○藤原健	稲川昌生	梶長谷川誠一郎	古屋	○古屋	○古屋	梶村光男	庄司	○庄司	枝村利一	岩上那須雄	板橋貢一郎	坂田亮	商工学校			大将 安西正憲	副将 後藤政行	小坂	○小坂	鈴木康吉	

高橋善資	引分	藤原保雄
副将 ○北川英一	引分	小倉和夫
北川	引分	○北川
大将 ○奥井津二	引分	副将 奥井
引分	大将 福田憲雄	引分
引分	引分	引分

現部員五段掛勝負

引分に終る。

五段 藤川常男	○跳腰 先鋒	安西正憲(2)
(八分二十三秒)	○大外刈	松岡一郎(2)
	○跳腰	小坂肇(2)
	○扠腰	成宮誠一(3)
	○足扠	高木忠祐(3)

五段 羽鳥輝久	○合技 先鋒	太田三四郎(2)
(十一分二十一秒)	○足扠	佐藤清(2)
	○釣込腰	渡辺徹夫(3)
	○合技	藤田肇(3)

五段 赤塚 豊

○跳腰 先鋒 井上 豊明(2)
 ○足 弘 佐藤 清(2)
 ○跳腰 磯辺 昇平(2)
 ○足 弘 渡辺 徹夫(3)
 ○大外刈 大将 楠瀬 和彦(3)

先輩対現部員紅白勝負

先輩軍

先鋒 ○内海 昭勝

内海 昭勝

笠原 慶太郎

○安藤

○安藤

○守谷 一郎

守谷 一郎

秋山 正

高木 恒次郎

○高木 敏男

○高木 敏男

岩崎 三郎

五島 三雄

副将 ○阿部 大六

現役軍

鈴木 康吉

引分 浜野 忠世

十字逆 ○志保沢 忠世

合技 志保沢 忠世

崩上四方 ○荒木 宗久

逆 荒木 宗久

引分 石渡 英二

足腰 ○磯辺 晃平

○磯辺 晃平

大内刈 渡辺 徹夫

引分 渡辺 徹夫

大外返 高木 忠祐

足弘 ○石渡 顯一

引分 石渡 顯一

引分 楠瀬 和彦

合技 渡会 卓蔵

○阿部 大六 釣込足 大将 飛田 常吉
 大将 阿部 英児 不戦
 右の結果進級せし者。

乙組へ編入 水野
 甲組へ 板橋貢一郎、岩上那須雄
 三級へ 竜野醇三、西村一雄、藤原 健
 二級へ 北川英一、奥井津一

商工学校対日本中学對抗試合

十月十日 於 日本中学道場

商工

先鋒

庄司

乙川

岩上

枝村

坂田

藤原

梶村

○長谷川

○長谷川

○長谷川

長谷川

稲川

引分 先鋒

引分 先鋒

引分 先鋒

引分 先鋒

引分 先鋒

引分 先鋒

引分 先鋒

引分 先鋒

引分 先鋒

引分 先鋒

引分 先鋒

引分 先鋒

及川

○村上

○村上

○村上

藤宗

熊谷

○杉浦

○杉浦

宮田

○廣川

○柳原

○柳原

小倉

引分

柳原

古屋

齋藤

副将 浜野

齋藤

副将 〇円谷

曾田

〇円谷

田中

大将 福田

引分

後藤

大将 福田

引分

小川

大将 梅

紀元二六〇〇年奉祝

第十二回神宮柔道大会

十月三十一日 明治神宮外苑

紀元二千六百年奉祝第十二回神宮柔道大会大学高等之部に第三位まで塾代表選手が占めて、その実力と堂々の試合振りに塾柔道の真価を高からしめた。

第一位 五段 藤川常男(高等部代表)

第二位 五段 飛田常吉(予科代表)

第三位 五段 赤塚豊(学部代表)

第一回 早慶對抗柔道戦

十一月十日 於講道館

審判員 八段橋本正次郎

(試合記事及戦績等は当時体育会柔道部より関係者に送付した報告書翰を載せて之れに代える)。

謹啓 時下晩秋之候貴堂益々御清栄之段奉賀候

陳者弊部多年待望の全慶早柔道試合の誓約成つて以来半歳諸先輩の精神的、物質的の御後援を忝うし、部長、師範始め部員一同厚く御礼申上候

第一回の栄えある優勝を獲得せんものと、部員一同血と汗の鍛練を続け、必勝の信念を以て早稲田大学に見え候も左記の如き経過を以て恨みを呑み、明年を期するの止むなきに立至り候事真に残念に存じ候

我軍は勝負に破れたるにあらずと雖も、要は早稲田の態度如何に拘らず之を制圧し得る絶対的実力に欠くるものと言わざるを得ず、此の意味に於て今年の敗戦を将来に生かすならば、あなたがち無益とは存ぜられず、ただ部員一同の志気阻喪するを恐るのみに御座候 幸い一同臥薪嘗胆の意気盛にして試合翌日、合宿最後の練習も早や明年を期して猛練習仕り候間、何卒部員一同の哀情御斟酌の上一層の御鞭撻を賜らん事を伏して懇願仕り候

尚試合経過報告及び今後一同の覚悟すべき事柄等左記の通り列記仕り置候間御披見の上機会あらば直々御叱声を賜り度願上候

敬 具

慶応義塾体育会柔道部

第一回慶早柔道試合経過報告

機運熟し、多年懸案の全慶早柔道試合は十ヶ年継続の誓約成つて、昭和十五年十一月十日、紀元二千六百年記念祭と日を同じうして水道橋講道館にその歴史的な幕を切つて落した。

講道館否都下に於ける柔道試合始めて以来の大観衆は道場に溢れ、六、七千人とも見えた。

型通り開会式終つて試合は本塾（紅軍）池田、早大（白軍）熊井によつて開始さる。時に三時十五分。

池田(2)―熊井(3) 先鋒を承わる両選手態度正々、熊井動作大きく技鈍しと雖も、なかなかの強者、右内股、左跳腰数度試みて優勢、時に大内刈を放つ。池田守勢固く引分。

安西(2)―田部(3) 安西十四貫、田部二十七八貫の体軀の相違は、試合態度に想像される。田部両襟を持つて極端なる左構、強引に釣込腰、払腰にひっかけんと焦慮れども、体軀倭少、寝技に優れ、試合巧者の安西相手の下襟をとり機に応じて軽く軀を捌き受け付せず、時に巴投を試みれども田部の巨軀に圧されて無効、田部憤慨すれど引分は当然。

太田(2)―山内(3) 太田二十九貫、山内二十貫余、山内盛に右釣腰、背負等に攻むれど太田の巨軀にはじき返され或は潰される。山内盛に攻めたるが効果無く、太田も隙を見ては左大外、内股を覗う。伯仲の実力、引分。

横井(3)―鈴木(3) 既に講道館月次勝負に於て二度敗れている三段先鋒横井此度は敗れじとがっちり構えて左右の技を見せて牽制、鈴木敏捷に右内股、大内刈と攻めて優勢なれど時間となる。

高木(3)―永富(3) 永富右内股、跳腰に牽制しつつ、左釣込腰を閃かし優勢、高木固く構えて防禦、左釣込腰の返る処を小外刈に払つて技有りとも見えたが惜しくも極らず、永富寝技に襲うも高木よく立ち引分。

安田(3)―西沢(3) 両者二十三貫位の同じ様な体軀、西沢場外近くになるや、しきりに右内股、払腰で巻込んで来るが、安田後から腰に抱きついて得意の寝技に引込まんとするも、場外に出て目的を達せず時間来る。

石渡(3)―森(3) 森二十貫程、体軀稍々優つて、右自然体に相手をはきまわして右内股、大内刈に攻めたる前半戦を有利に展開せんものと思気盛、石渡巧みに体をかかわして受け流す、森足をとつて寝技に入り首をねら

い、更に縦四方に入って極ったかと思えたが、石渡くるりと廻る。再び首をねらって来るを場外に立上って分れる。小内刈に技有りをとりたる森、右内股を連発して遂に合せ技に早軍最初の一点を挙げ均衡破る。

山崎(3)―森(3) 山崎綺麗な体捌き、森右内股巻込気味に攻むるも受付けず、足払の応酬一二度のうち、森右足払に来て返るところを、立直る隙を与えず右足払牙えて試合は再び平衡す。

山崎(3)―小西(3) 寝技に得意の小西、真直ぐに立っては危しと機を覗う。巴を連発して頻りに寝技に引込まんとするも、山崎よく逃げる。小西足をとって大内刈に技有りをとり、その儘寝技に入り、山崎頑張れど肩固極って敗る。

渡辺(3)―小西(3) 寝技巧者の小西を此処で喰いとめなければ味方危うしと、塾軍随一の寝技巧者渡辺試合を挑む。小西立技も相当強く試合駆引巧みにして渡辺より寝技に於ても優ると見えた。大内刈より横四方に攻めたて、抑込みの態勢に入らんとする。渡辺流石寝技の巧者直ちに打伏せになって逃れるを、小西すかさず逆十字固に入り極るかに見えたが、渡辺綺麗にまわって健在。再び立って小西巴投より引込まんとすれば、

渡辺よしとばかり寝技に攻めるも場外、小西稍々優勢裡に互に譲らず、寝技に攻め合い、渡辺絞を逃れて中央に組み直さんとする時二鈴鳴る。

和田(4)―草野(3) 草野三十四貫の巨軀には、和田得意の左大外も効なく危しの感あつたが、動作の鈍い草野の技もかからず数分、和田自重して技をかけず、草野巨体を煽って左大外刈をかければ、和田廻り端をひっかけられて、軽く落ちたが一本となる。

楠瀬(4)―草野(3) 楠瀬十七貫、低く右背負に行くも浮かず潰される。楠瀬数度の巴引込も効なく、草野寝技不得意の事とて引分に終る。

三井(4)―後藤(3) 早軍三段の大將、後藤堂々たる態度、二十二三貫、均整とれて右内股、大外刈と積極的な攻撃に出る。三井一本背負にかつがんと一度、二度試みるも効なく、互に覗ううち、後藤の大外巻極って二人負越し、塾軍四段陣危し。

渡会(4)―後藤(3) 試合巧者の渡会、体なくまともに構えては不利と、小内刈、背負、釣込足、払腰と連発すれど後藤動かず、渡会巴投にひっくり返さんと試みれど効果なし。後藤右小外、右大外刈に攻む、渡会小内にゆくを後藤裸絞に入り、極るが如く見えたが、頭に

手をかけたので審判に注意され、送襟に移ったが逃れて立つ。引分。

桑原(4)―樋渡(4) 桑原二十六貫、樋渡十九貫位、元氣に出て来るも身振りだけで全然組まず、試合忌避の態度、俄然此処より早稲田の引分戦法は徹底的になって来た。持たずに逃げ場外に出ては技をかけ寝る。施すに術なく引分。

飛田(5)―由井(4) 塾軍五段先鋒飛田。十九貫、身も軽々と立向う。由井顔面蒼白、徹底的引分態勢、柔道着に触れる事なく場外へ、場外へと逃れる。此頃より弥次しきりとんで、審判注意すること再三なれども予定の事なれば早軍当然と許り態度を改めず、審判しからばと両者を組ませれば途端に寝る。全然手のつけ様なく引分。

俣野(5)―安田(4) 先に講道館月次勝負に抜群し、充分自信を持つ安田、左構え積極的に攻めて出る。両者互に腰を引いて機を見るうち、俣野遠くより右小内刈をかけると、安田軀をひいてかわし、左足に払って一本。

赤塚(5)―安田(4) 安田元氣に大物を喰わんと立向うも赤塚悠々、数分の後大内刈よりの内股美事に極る。

赤塚(5)―三田(4) 型通りの試合忌避態度、審判再三注意の後、組ませて始むれば直ちに寝る。赤塚当惑して寝技に攻めんとすれど、中途半端な気持故徹底的に攻められず、三田死物狂いに逃げまわって引分。

田岡(5)―木内(4) 之又、甚だしき引分態勢、場外へと逃げては小内刈等にて反撃す、審判注意の上、組ませんとすれば、審判の手を払いのけて逃げる。その狡猾、厚顔には言うべき言葉なし。

羽鳥(5)―坂口(4) 早軍随一の元氣者嘉穂中学出身の坂口、僚友の態度潔らからず思ったか、断然積極的に出て、大外刈にひっかけ巻込まんとする。羽鳥二十六貫の巨軀を軽々と捌いて之を受流し機会を覗う。坂口元氣に絶え間なく攻めたてるうち、深く大外刈に入る所を羽鳥腰を捻って釣上げ氣味に返して一本、坂口敗れて悔なき善戦である。

羽鳥(5)―金沢(4) 金沢二十一貫なれど、がっちり固く、羽鳥の巧妙な小内刈、釣込腰を巧みにかわして受け付かず、守勢乍ら時には大外刈を放って態度稍々立派、羽鳥とらんとあせるも、金沢、羽鳥の技を研究し尽していると思え遂に引分。

藤川(5)―沢田(4) 塾軍大将藤川出陣となる。五尺九寸

の沢田左に極端の自然体、積極的に攻めて功名せんものときおい立つ。藤川上背に於て稍々劣るが、二十三貫の体軀がっちり構え、機を見て左大刈、大内刈にひっかけんとするも、沢田左構えの為ゆるがず、守勢を時々攻勢に転じて意気颯爽、態勢不利と見るや寝て分れる。藤定大外をひっかけ、傾く所を巻いて技有り、一鈴後引分けに終るかと思えたが、大内刈に倒して一本極る。

藤川(5)―小田(4) 早軍副将小田引分して大将を残さんと、弥次は覚悟の引分態度、審判に注意され、腰をひいて申訳ばかりに持ったが、危うしと見るや巴に寝て、遂に目的を達し、万事終る。

斯くして第一回全慶早柔道試合は早軍の優勝する所となり、塾橋本部長の手より優勝旗と、両校総長盃は早軍大将尾崎、副将小田に夫々授与された。

橋本部長の閉会の辞に、明年は学生として恥じない態度で再び見えたいと言ふ言葉は、居並ぶ早軍選手に如何にひびき、観覧者に如何なる感銘を与えたであらうか。

前半、中堅に優勢の早軍が、後半とるべき態度は戦前充分予想された所にして、勝たんが為に手段を選ばずと言ふ主義を忠実に実行したまでである。それに対し我

々は相手を非難し、審判法の不備を考える前に、相手が如何に卑怯な態度に出ようと、尚よく勝ち得る実力を養わねばならぬ。

具体的に言うならば、引分戦術に来た場合、寝技によつて制圧する丈の実力が絶対に必要である。塾柔道部が此の点に就いて深く自覚し、明年に処するならば、此の敗戦も亦有意義となるであらう。

早慶柔道戦の審判に就て

(引分戦法を戒しめて読売新聞の古賀残星氏が十一月二十五日付三田新聞に寄稿された一文を抄載させて頂く。)

全早慶柔道試合が二千六百年の佳い年に実現したことを何よりも欲びたい。他のあらゆる早慶戦は立派に行われているのに柔道だけが出来ないのは、早慶柔道部の恥ばかりでなく、広く柔道界の恥辱でもあった。試合となれば勝ちたいのは人情で、特に早慶戦となると天下の風雲を呼ぶだけに、その感情も濃厚になる。吾が校の強い時に始めたい、出場選士の数も、わが校のよい条件で行いたい、斯うした考えが湧くのも当然だ。けれど、我を言い張つてはいつまでも実を結ばなかったが、両校

の代表は新体制下の学生らしく、そうしたいきさつを一擲して本年より試合実現、選士は二十名審判規程は講道館審判規程に依る、この誓約は向う十ヶ年間之を厳守す等々、と堅い約束を交し、一書をいれた。(二七五頁参照)私はその立会人になっている。幾度か会合し協議をしたのであるが、両校の代表諸君の心労もさぞかしと思われるものがあつた。

かくして待望の第一回全早慶柔道試合は菊香かおる奉祝日の十一月十日講道館大道場に於て火蓋は切られたのである。

柔道界の実状を知るものならば、この勝敗は慶が六分で、早が四分と予想するのは常識である。しかし私は読売新聞に書いたようにそうはいわなかった。というのは早が前半に勝ち越すならば必ず喰いさがる戦法に出ることを考えていたからである。最後の打合せの日、審判員の橋本八段からも注意があり特に私も「引分主義に墮せないように、堂々たる試合を見せて欲しい」と希望しておいた。その席上には慶の田岡君も、早の木内君もいた。先鋒から六名は引分けたが、早は十一将の樋渡からは、安田、坂口、沢田をのぞけば殆ど引分主義の作戦に出た。慶応の人達は齒痒くもあつたらうし、一般観衆も

遺憾に思つた。しかし慶の前半の頑張りも認めなければならぬから、早ばかりを攻めるわけにはいかない。

勝つ實力を持ちながら、負けた慶応だ。残念ではあるが社会の眼は確にみている。それでよい、時代はそこまで進んできているのだ。美しい協和の心で、過去となつた淬をすててこれから建設する試合法を私は談じたいのである。

講道館審判規程の第十六条に『審判員は試合中不都合の行為ありと認むるときはその試合を止めしむべし且又行為の如何によりては負と見なすことを得』とある引分主義に出たものを不都合といへばいえるけれど、これを負とする法は殆どとられていない、昭和十一年四月の福岡における全日本柔道大試合にも十五年二月宮崎での對抗試合でも、片方が逃げて組まないような試合があつたが、やはり宣告は引分であつた。

日本柔道選士権大会審判規程の第五条に『試合が投技又は固技により勝負決せざるときは姿勢態度技術の巧拙又は其他の動作等により優劣を比較し勝負を決す』とある。この判定勝の審判法を紅白對抗試合で採用した大試合といへば昭和十二年五月名古屋に於ける東西對抗だけである、これは成功であつた。

戦いは攻めることもあれば、防ぐことも大切だ。一枚を代表して戦う選手としては責任を重んずる故に、強い相手には防禦に終始して糞垂腰になるわけだが、その選手の心情も若干汲んでやらねばならない。が観ていては見苦しい行為であり、柔道精神ではないのだ。第一回の苦い経験を基として第二回からは立派な試合が出来るように協議をしよう。審判法その他について、そして流石は全早慶戦だといわれるように学生柔道の範にまでなしたいと念願する。

紀元二千六百年記念

第一回全国学生柔道大会

十一月二十三、二十四日 甲子園特設道場

皇紀二六〇〇年奉祝の同大会は東京日日新聞主催、文部省後援で行われ、塾柔道部より田岡協五段、赤塚豊五段、羽鳥輝久五段、藤川常男五段、飛田常吉五段の五名が出場し何れも優秀な成績を収めた。十一月二十五日東京日々新聞は個人優勝決定戦の戦評として『注目された試合は西本四段(名高商)と赤塚五段の準決勝戦、赤塚五段対羽鳥五段の準々決勝、島名五段(中大)対羽鳥五段の四回戦、藤川五段対神山四段(武専)の三回戦とで

あった。赤塚五段と西本四段は試合巧者ぶりに、又羽鳥五段が島名五段を技有り二本で破ったのと、神山四段が藤川五段を内股返して鮮かに破ったのとは、共に金星といえよう』と記している。又東西對抗戦では田岡五段が武専の中村四段を内股に、赤塚五段が武専の山岸四段を足払に、飛田五段が武専の本江四段を払腰に破り東軍の優勝に寄与した。

東西對抗戦・出場塾選手の戦績

○飛田常吉(5)	跳腰	本江(4)(武専)
飛田	引分	井上(3)(名高商)
羽鳥輝久(5)	内股	○中村(4)(武専)
○田岡協(5)	内股	中村(4)(武専)
田岡	引分	難波(4)(同大)
○赤塚豊(5)	釣込足	山岸(4)(武専)
赤塚	引分	神山(4)(武専)
藤川常男(5)	引分	松本(4)(武専)

進級月次試合

十一月二十七日

無級の部

1 島田啓治	引分	中野正夫
2 中野正夫	引分	下林達雄

三級の部				甲組の部				乙組の部				丙組の部					
2	1	4	3	2	1	1	9	8	7	6	5	4	3	2	1	4	3
龍野	龍野	板橋	岩上	岩上	福島	水野	曲谷	八木	八木	八木	平野	平野	平野	西谷	西谷	島田	下林
	醇三	貢一郎		那須雄	義文	次郎	健一			徳治郎			三郎		彬	啓治	達雄
引分	内股	引分	合技	引分	引分	引分	引分	絞技	大内返	引分	足弘	払腰	体落	引分	合技	引分	引分
清水	西村	枝村	○板橋	水野	岩上	福島	錦織	星野	片岡	齋藤	○八木	齋藤	浅井	平野	齋藤	○島田	西谷
源太郎	一雄	利一	貢一郎	次郎	那須雄	義文	栄	輝仁	重仁	完雄	徳治郎	親平	富彦	三郎	親平	賢治	彬

二級の部

1 ○峰岸仙二 大外刈 森岡賢一郎
 2 峰岸 体落
 3 池貝 孝 痛分
 4 ○池貝 大外返 北川英一
 5 池貝 体落
 6 奥井津二 引分 塩山保二
 7 清水源太郎 引分 塩山保二
 ○森岡

右の結果進級せし者左の如し。

丙組へ 中野正夫、下林達雄、島田啓治、浅井富彦、錦織

栄、曲谷健一、西谷彬

乙組へ 平重三郎、八木徳治郎

三級へ編入 清水源太郎

二級へ 古屋鴻